九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『パリの大虐殺』と宗教紛争・王権言説

大島, 久雄
Kyushu Institute of Design

https://doi.org/10.15017/4061001

出版情報：芸術工学研究. 4, pp.45-56, 2001-08-10. 九州芸術工科大学
バージョン：
権利関係：

論文

『パリの大虐殺』と宗教紛争・王権言説

Massacre at Paris and the Discourses of Religious Conflicts and Kingship

大島久雄
OSHIMA Hisao

The purpose of this paper is to analyze the political meanings of Marlowe's *Massacre at Paris*, situating it in its historical and ideological contexts. The Elizabethan drama served as a central urban mass media, contributing much to the formation of political discourses in the society. The sharp increase in the number of published pamphlets about French matters in England suggests that the Elizabethan people's interest in the turbulent political situation of France grew more and more from 1585 to 1592, just before the first recorded performance of the play (1593). As England itself was seriously involved in the religious conflict, the French religious war exerted a lasting influence on the English political thought, especially on the ideology of kingship. The radical ideologies of More, Machiavelli, and Hotman, much fermented in the religious conflicts, form an essential part of Marlowe's play, which deconstructs the traditional idea of ruler in its satirical descriptions of holocaust and intolerance.

演劇とイデオロギー

エリザベス朝イングランドにおいて演劇は都市のマスメディアの主要な一端を担っていた。その特殊な歴史的・社会的・文化的文脈の中で演劇がどのような政治的な意味を持ち得たかについて検討することは意義のあることであろう。当局の厳しい検閲の目にさらされながらも、エリザベス朝演劇には、政治的メッセージを濃厚に含む作品が少なくない。当時、一般大衆のジャーナリズム的好奇心を満足させていたものとしては、演劇を除けば、「パンフレット」と呼ばれる小冊子や、最近の出来事を主題とした俗謡や散文物語があるのみであった。現代のマスメディアに課せられた政治的中立性とは無縁なイデオロギー環境の中で、これらの作家達は、劇場や出版のマスメディア性を生かし、政治的立場を強烈に打ち出した時事性の高い作品を生み出した。

勿論、この時代に政治的立場を鮮明に打ち出すことは、検閲は言うまでもなく、身体的処罰を含めて、大きな危険を伴う行為である。特にある特定の劇場における特定の劇団との共同作業を前提として執筆活動を行っていたエリザベス朝商業演劇作家にとって、こ

のような危険は致命傷になりかねない。パンフレット作家達がしばしば偽名の使用などによって作者の隠蔽を試みたこと、劇作品の政治性が間接的な言及にとどまり、オブラートに包まれている場合が多いことは、容易に理解できる。

当時の演劇が、どの程度に大衆の政治意識に作用し、世論の形成に影響を及ぼしていたかについては、現存する資料の不足等によって、具体的に明らかにするには限界がある。しかし少なくとも個々の作品の政治性を検討する作業を積み重ねることによって、エリザベス朝演劇の政治的な機能に関する理解を深めていくことは可能であろう。本論は、シェイクスピアと同時代に活躍した劇作家クリストファ・マーロウ(1564-93)が、当時のフランス宗教紛争を題材に書いた劇作品『パリの大虐殺』(図1)を取り上げ、当時のイデオロギー環境の中で劇がどのような政治的ディスコースの形成に寄与し得たかについて検討する。

『パリの大虐殺』と宗教紛争パンフレット

シェイクスピアの『嵐』は、劇作家の最後の花道を飾る作品として一定の評価を受けてきたが、それに比べるとマーロウ最晩年の作『パリの大虐殺』は全く逆の運命を辿ってきた。その要因の一つには、現存するテキストの質の問題があるが、それだけでもないように思われる。ラウスはこの劇を「時事的メロドラマ」と呼び、その時事性も浅薄だと否定する。[1] サンダースは、何故、マーロウ程の劇作家が観客の低級な趣味に迎合してこのような国粋主義的宣伝劇を書き得たのかと疑問を呈する。[2] このように従来の批評においては劇の政治性は軽視され、流血悲劇として誇張や歪曲、センセーショナリズムだけが強調される傾向が強い。

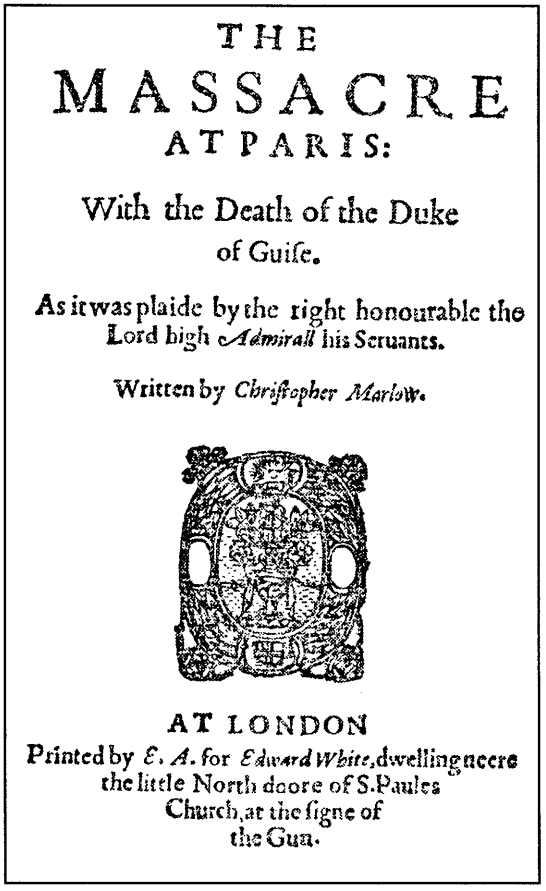
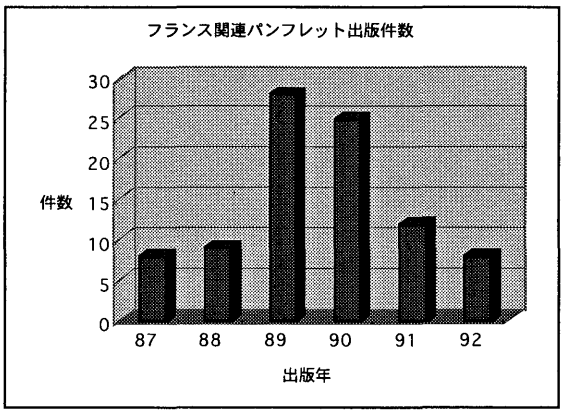

THE
MASSACRE
AT PARIS:
With the Death of the Duke
of Guise.
As it was plaide by the right honourable the
Lord high Admirall his Seruants.
Written by Christopher Marlow.
AT LONDON
Printed by E. A. for Edward White, dwelling neere
the little North doore of S. Paules
Church, at the signe of
the Gun.

図 1:『パリの大虐殺』(1601年出版)

しかしラウスとサンダースは当時の演劇がマスメディアとして持ち得た政治性をあまりにも軽視してはいないだろうか。ハイネマンは、ルネサンス期英国において演劇が人々の政治的メンタリティ形成に果たした重要な役割を指摘する。厳しい検閲にも関わらず、演劇には多様な形で政治が浸透していた。政治に対する民衆の強い関心のために「危険な題材」を取り上げたいという興行的誘惑も絶えず存在したという。[3] 『パリの大虐殺』は、マーロウの作品

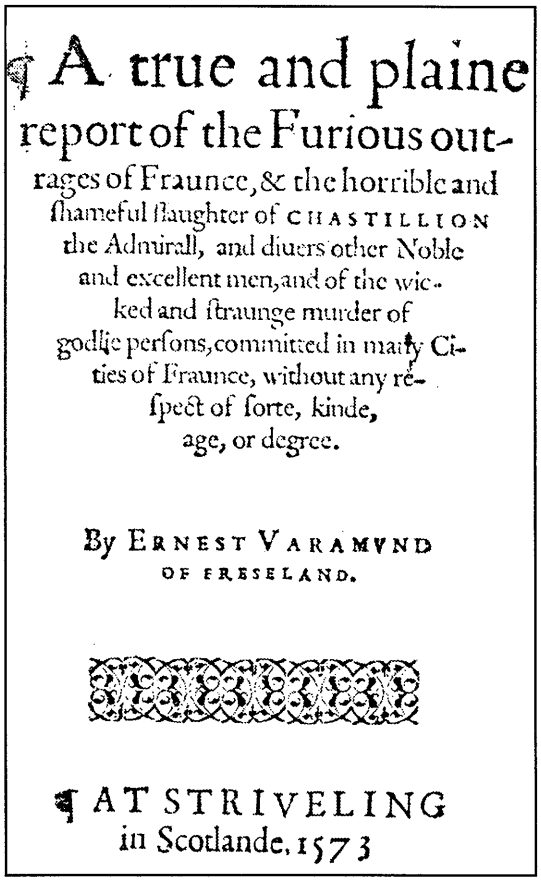
の中で、ある意味で最も深刻で、危険を孕んだ政治性をおびている。記録に残る最初の上演は、1593 年 1 月、ローズ座でのストレンジ卿一座によるもので、興行収入の点では大きな成功をおさめているが、疫病による劇場閉鎖のために公演はうち切られた。[4] 演劇という都市型マスメディアを介し、当時のイデオロギー環境の中でこの劇はどのような意味を持ち得たのだろうか。

『パリの大虐殺』は 1572 年から 1589 年頃までのフランス宗教紛争を描いている。マーロウの諸作品に濃厚な影響を及ぼしているマキアヴェリによると、本来、宗教は国家統合の要となりうる重要な政治的制度としても機能する。それゆえにマキアヴェリは、ローマ建国の功績に関して、建国の祖ロミュルスよりも、宗教を導入して国を安定させたヌマを高く評価している。[5] しかし宗教が国家統合を破壊する場合もある。マーロウの時代において旧教と新教が引き起こした対立は、全ヨーロッパを巻き込み、国際関係と微妙に関連した深刻な政治問題に発展していった。フランス宗教戦争は、ローマの精神とジュネーブの精神との対立するイデオロギーの戦いであったとされるが、エリザベス朝社会もこのイデオロギー対立の渦中にあり、演劇と並んで、いわゆるパンフレット作家達が宗教対立に関する世論形成に大きな役割を果たした。飛び交う反カトリック、反プロテスタントのプロパガンダ・パンフレットが、イデオロギー対立を先鋭化させ、戦闘的で過激な政治的ディスコースを生む。英国でのフランス関連パンフレットの出版件数は、60 年代後半は多くても年に 3 件であったが、 以下のグラフに見るように80年代後半から急激に増加し、ちょうど劇が書かれた時期と重なる 1589 ～ 91 年に頂点に達する。[6] 無敵艦隊撃破にもかかわらずカトリックの脅威に対する英国国内の不安はますます強まり、様々な内的・外的問題を抱えた社会において反カトリック・イデオロギーが、国家統合の国民的アイデンティティとしてすら機能していた。[7] イデオロギー対立が先鋭化したこの時期に『パリの大虐殺』が書かれたという事実は非常に興味深い。



聖バルテルミー大虐殺を描く劇の前半に関してマーロウが使用した材源は、フランソワ・オットマン著『フランスの残忍な蛮行についての紛れもない真実の記録』(1573) である。[8] オットマンは、彼自身、聖バルテルミー虐殺の難民ユグノーの一人であり、後にジュネーヴ大学で教鞭を執る著名な法学者である。彼は、事件の翌年、虐殺の生き証人としてだけでなく、法学者として、当時の国際的学術用語のラテン語を用いて、虐殺事件を批判し、それに関するフランス国王の責任を糾弾するパンフレットを書いた。「フリーズランドのエルネストゥス・ヴァラムンドゥス」という匿名により本書は出版されており、その翌年に英国で出された英

訳版の訳者については名前も分かっていない。英訳版は、ロンドンで出版されたが、スコットランドの地名が出版地として記載されている(図２)。このような偽装は、パンフレットがいかに微妙な宗教的・政治的問題に触れていたかを示す何よりの証拠であろう。この手のパンフレット作家達によく見られる慎重な態度と比較すると、「危険な題材」を公然と公衆劇場の舞台にかけたマーロウの大胆さには驚くばかりである。


¶ A true and plaine report of the Furious outrages of Fraunce, & the horrible and shameful slaughter of CHASTILLION the Admirall, and diuers other Noble and excellent men, and of the wicked and straunge murder of godlie persons, committed in many Cities of Fraunce, without any respect of sorte, kinde, age, or degree.

By ERNEST VARAMVND OF FRESELAND.

¶ AT STRIVELING in Scotlande, 1573

図 2：オットマン著『真実の記録』

宗教紛争と君主観の変容

宗教対立が生み出したイデオロギー戦争は王権に関する政治思想と密接に関連していた。オットマンは、虐殺事件の 10 年ほど前に遡り、宗教対立がフランスにもたらした内乱の連続を描いていく。ヨーロッパ諸国の介入により紛争は何度も中断し、和平が取り結ばれて、国王は国の内外に信教の自由を宣言するが、勅令はすぐに反古にされて、宗教弾圧によって内乱が再発する。その繰り返しであった。オットマンは「国王の名は偽証と裏切りという最も不名誉な汚点によって汚された...」(p. xiii) と王の責任を糾弾する。

このような神聖であるべきはずの王権に関する理想と現実の乖離はすでに様々な形で人々の意識に上りつつあった。『ユートピア』においてトマス・モアは、架空の航海者ピーター・ジャイルスを代弁者とする独自の匿名性の中で鋭い予見的諷刺を閃かせつつ、「正義は、卑しい庶民的美徳にすぎず、王の尊厳には全く相応しくない」と皮肉に述べた。[9] 良心と良識の人モアは、真の信義を基礎とするものではない、ご都合主義的な和平条約の締結に奔走する国王や大司教にすら痛烈な諷刺の矛先を向ける。ユートピア人は、そもそも、すでに友好関係にある外国と同盟を結ぶ必要性を認めない。ところが「ヨーロッパでは、もちろん、特にキリスト教国の間では条約は神聖で不可侵であると常に見なされている。これは、一部は善良で正義を守る国王達のお陰であり、また大司教達に王が強い畏敬の念を抱き、彼らの働きかけに従うからである。」(p. 106) しかしこのような信義に満ちたヨーロッパが、ユートピアと同様にどこにもなかったことは、モアの皮肉な筆使いに明白であり、オットマンのパンフレットはその何よりの

証拠である。モアが諷刺し、オットマンが痛烈に批判した政治の現実を直視することによって、マキアヴェリは、新たな君主論を構築し、政治から宗教や倫理を分離して現代的な政治学の祖となった。マーロウは、このような時代思潮を敏感に劇作に投影している。

劇前半の「血の結婚式」と聖バルテルミー大虐殺は王の裏切りの極例である。新教と旧教の和解を象徴すべくユグノー側指導者の青年貴族ナヴァールとフランス王の娘との間に取り交わされる聖なる和合の儀式は、実はユグノーをパリに集めるための計略にすぎなかった。オットマンに基づいてマーロウが劇化しているように、この奇妙な和解の結婚式は、両宗派の関係者が参加できるように、ノートルダム寺院の前の広場で執り行われた。式後、王と花嫁の王女、その他のカトリック教徒達はミサに参列するために寺院に入り、花婿ナヴァールとそれに従うユグノー達は近くの牧師館でミサの終了を待つことになる。「メディチの毒蛇」と呼ばれる王母カトリーヌの「この結婚を血と残虐な行為でぶち壊しにしてやりましょう」(I.25)という傍白は破局の必然性を予兆している。エリザベス朝の劇作家達がマキアヴェリ的悪党を多数舞台に登場させて、歪曲されたマキアヴェリ像を定着させるよりも前に、フランスではすでに王母カトリーヌとその取り巻きのイタリア人宮廷人達がマキアヴェリ的策略の源であるとする悪評が流布していた。[10] 聖バルテルミー大虐殺そのものがマキアヴェリ的策略の明白な実践例として見なされ、この虐殺事件を契機に反マキアヴェリ感情が、インノケント・ジェンティレットの『アンチマキアヴェリ』等の出版物としてイギリスにおいても流行し始めるのである。[11] 当時、マキアヴェリの教説が大いに関連しているとみなされていた虐殺事件をマーロウが劇の題材として取りあげたことは興味深い。実際に劇では、後で述べるように、エリザベス朝的なマキアヴェリズムも含めて、ギーズを中心にマキアヴェリ的言説が重要な悲劇的モチーフとなっている。

宗教対立とホローコースト

マーロウは、プロテスタントとカトリックの両派の宗教的キーワードを強調することによって、根深いイデオロギー対立を浮き彫りにする。シャルル九世の「聖なるミサ」は、ナヴァールの「福音書」と対置され、旧教の伝統的祭式主義と改革派の福音主義の対峙が強調される。この手法は虐殺の場面でも効果を上げている。「神の御言葉を説く者」と名乗るユグノー牧師ロレーヌに対して、虐殺の首謀者ギーズ公爵は「誠に愛しい兄弟よ」という当時のユグノー牧師の常套句を嘲笑的に模倣しながら、ロレーヌを剣で殺害する(VII.3-5)。ユグノーのセルーンは、剣を突きつけられ、「救い主キリストよ!」と叫ぶと、虐殺者モンソレルは、「聖人の仲介なしにどうしてキリストに厚かましく呼びかけるのか。聖ヤコブが俺の聖人だ。彼に祈れ」と嘲る(VIII.9-12)。信仰による人間と神との直接的な交わりを重視する新教と、聖人やマリアによる仲介を強調する旧教との相違が明確に示されている。

宗教対立の深刻な危険性についてもモアは端的に諷刺している。ユートピアを築いたユートプス王は、先住民族が宗教の相違によって争いを繰り返し

ていたのを見て、全ての人に信仰の自由を認め、排他的な宗教論争を厳しく禁じる法律を制定した(pp. 120-21)。しかし当時の現実のヨーロッパでは、宗教的寛容は正にユートピアに属するものであり、オットマンが批判した宗教的不寛容に起因する民族浄化は、残念なことに今日に至るまで西洋文明の悪しき伝統の一部として残っている。フランシス・ベーコンは、マーロウよりも遅れて、『随筆集』(1597)の中で聖バルテルミー大虐殺を振り返り、ローマ詩人ルクレティウスの言葉を引用しながら「宗教の名において何たる行為がなされていることか」と嘆いている。[12]

図 3：ローマ発行大虐殺記念メダル

ベーコンは、虐殺事件と議事堂爆破未遂事件を並置し、当時の政治的文脈の中で新たに具象化しつつある危機を感じ取っているが、マーロウの批判意識と、ベーコンのそれとは根本的には通い合っている。無意味で残虐なホローコーストの現場そのものに目を注いだという点では、マーロウは、ホローコースト文学の先駆者と言えるのではないだろうか。聖バルテルミー大虐殺はカトリック陣営にとって神の勝利であり、この聖なる日を祝うために大規模な祝祭がフランス各地とローマにおいて催され、記念メダルなども発行された(図３・４)。

図 4：パリ発行大虐殺記念メダル

ローマで発行されたメダルには、法王グレゴリウス十三世の肖像と、異端者の死体の山に十字架をかざして勝ち誇る天使の絵が描かれている。パリ発行のメダルでは、王の象徴である天蓋付きの玉座を背に、王位の印である剣と錫杖を手にしたシャルル九世が立ち、足下には異端者の屍や首が横たわっている。そしてその裏面には王家の紋章に勝利を象徴する月桂樹の枝をあしらい、「篤い信仰心が正義を呼び覚ます」というラテン語の言葉が刻まれている。

『芸術家列伝』によってよく知られている画家ヴァザーリは、グレゴリウス十三世から異端者粛正の記念に大虐殺の絵をヴァティカン宮殿の壁に描くように依嘱された。完成した壁画を見た法王は喜びのあまりに感涙に浸ったという(図5)。この壁画では、ギーズを思い起こさせるカトリックの貴族が異端者を足で踏みつけ、剣でとどめを刺そうとし、兵士は逃げまどう女の髪をしっかりつかんでいる。窓からは犠牲者の遺体が正に放り投げられようとしている。マーロウは、このようなホローコーストの現場に発揮された不寛容なメンタリティをグロテスクなほどに舞台に暴き出している。『アリストテレス批判』を著し、新しい論理学を生み出した著名な哲学者ラムスも、虐殺の犠牲者となるが、劇では彼の学識すらも虐殺者の嘲笑の的にすぎない(VI)。海軍大臣コリニーの遺体に対する冒涜を描いた場面(VII)も、グロテスクな虐殺の不寛容性を浮き彫りにしている。

ギーズが邪悪な陰謀を独白で開陳した後(II)、ナヴァール母后毒殺と海軍大臣コリニー銃撃というカトリック側の裏切りが続々と展開する (III)。コリニーは、スペインに対抗する英仏同盟の締結に尽力した経歴を持ち、新教側の英雄としてよく知られ、死後、英国においても伝記的パンフレットが出されている (1576)。シャルル九世も外交・内政において、新教徒ながら、有能な臣下として彼を頼りにしていた。当時、滞仏していた英国大使は、虐殺事件に遭遇し、召使い二人と牧師を殺されながらも何とか難を逃れたが、この大使が、後に女王陛下のスパイ網を築き、マーロウも関係が深かったと推測されるフランシス・ウォルシンガムであった。[13]

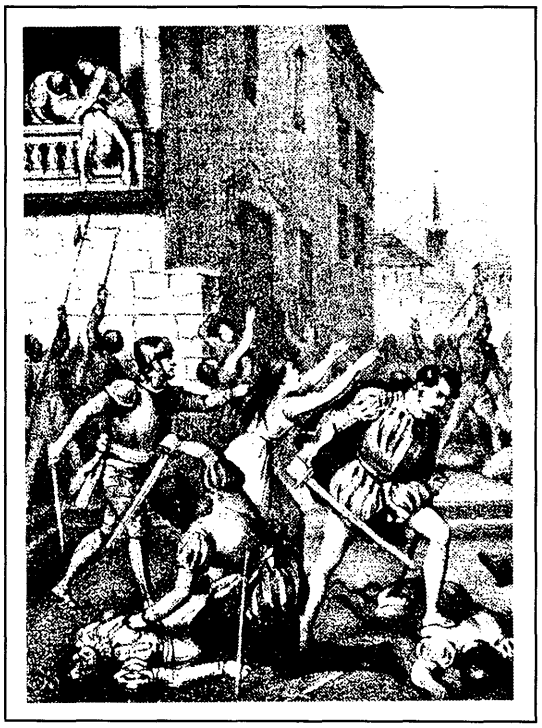


図 5：ヴァザーリ作フレスコ壁画

大虐殺に至る過程での国王の具体的関与については、史実としては歴史の暗闇に隠れて定かではないが、劇においてマーロウは明確な解釈を示している。世評や良心のとがめを感じながらも、カトリーヌやギーズの言いなりになっている王の軟弱さが強調され、王の荷担が明確に示唆されている (IV)。謀議の際の「異端の疑いがある者は、/ 王であろうが、皇帝であろうが、殺してやる」(IV.29-33)というギーズの言葉は明らかに王権への挑戦であるが、母親に支配されたマザコン的なシャルル九世には何も言い返す力はない。謀議の後で王は、銃撃されたコリニーを見舞い、犯人を「死罪によって報いることを、/ フランス国王として余は誓い、宣言する」(IV.50-53) と明言する。その直後に虐殺が開始され、コリニーは虐殺の最初の犠牲者になるのであり、

劇では王の偽善的背信は明白である。

王権批判とレジスタンス思想

マーロウの劇的な描写とは異なり、オットマンは国王の背信をより理論的な法律家の言葉で糾弾する。「もしパトロンまたは国王が被庇護者または臣下を欺くならば、彼らを支援する必要はない。臣下が君主に負う忠誠と同様のものを君主も臣下に負っている。大罪を犯した臣下が地位を失うように、王も大罪によって王位を失うとも言う。一説によると古代において王の右手("right hand") は、王の信義の保証と呼ばれていた。もしこれを王が軽んじるならば、王との正義 ("right") に基づいた対応は不可能となり、もはや彼は、臣下によっても、異国人によっても、国王とは見なされない。」(pp. lxix-lxx)

フランス宗教戦争が英国政治思想に与えた影響について研究したサルモンによると、エリザベス朝から名誉革命に至る時代の英国人は、フランスでの事件や政治思想を先例と見なし、それらから強い影響を受けた。フランス宗教戦争こそ、政治が神学に従属するような中世以来の伝統的政治思想を根底から覆し、王権に関する合理的見方を普及させる契機となった。[14] カルヴィニストのオットマンのパンフレットには王権に対するユグノー・レジスタンスの思想、つまり正当な理由があれば国王批判やさらには廃位や処刑までも辞さない「民衆抵抗」の理論が芽生えている。レジスタンス思想はナヴァール即位以降の旧教側パンフレットにも現れたが、すでに『ユートピア』にも民は民の幸福・利益のために王を「選ぶ」のであり、圧政によってしか支配できない君主は王よりも「牢番人」と呼ぶに相応しく、「廃位する方がましだ」という考えが示されている (p.45)。これは、シェイクスピアの『リチャード三世』や『マクベス』などに見られる悪しき王が摂理によって裁かれ破滅に至るという伝統的暴君論とは根本的に異質な発想である。

マキアヴェリ的政治風土

このような宗教や倫理から独立した政治学の確立に大きく貢献したのは、マーロウも強く影響を受けたマキアヴェリである。[15] マーロウが学生時代を過ごしたケンブリッジではマキアヴェリの書が熱心に読まれていたことが知られている。[16] マキアヴェリの政治思想も伝統的な王権像の変容を余儀なくするものであった。『マルタ島のユダヤ人』の序詞において登場する「マチェヴィル」(“Machevil”) は、現存するエリザベス朝劇作品においてマキアヴェリが登場人物として現れた最初の例であるが、最近亡くなった自分の弟子としてギーズを紹介する。『パリの大虐殺』においてギーズは、エリザベス朝的マキアヴェリズムの完全な体現者として描かれている。『マルタ島のユダヤ人』の悪党主人公バラバスと同様に、ギーズには、目的達成のためには手段を選ばず、策略と悪の限りを尽くす悪党野心家としての側面、いわゆるエリザベス朝的マキアヴェリストの姿が強調されている。ただしマーロウの諷刺的な視点は、皮相なマキアヴェリズムの域にとどまるものではない。それはジェイムソンが指摘したガブリエル・ハーヴェイのバーレスク的な態度と重なる面があるであろう。「マチェヴィ

ル」そのものにもハーヴェイのマキアヴェリ諷刺詩の影響が指摘されてきた。『マルタ島のユダヤ人』で人気を博したマキアヴェリ的悪党の人気を活用し、しかも批判的な諷刺を隠れ蓑として、マキアヴェリ的政治風土の核心をつこうとする計算が、『パリの大虐殺』執筆時のマーロウにはあったに違いない。

ギーズのシーザー主義的野心 (II.95, XXI.67) は、最終的には「フランスの王冠」 (II.41) を狙っている。そのために「スペインからお偉いカトリックどもが / フランス金貨を作れとインドの黄金を送り」、そのために「自分は法王から贈り物をもらい、/ 年金と免罪も得ているのだ」(II.57-60)。ギーズは旧教側陰謀の化身でもある。パリの多数の学寮や修道院で培養される過激カトリック分子に関するギーズの独白 (II.77-84) は、情報通マーロウらしく詳しく人数にまで触れて妙に生々しい。当時、イエズス会派宣教師達による英国での旧教勢力拡大と陰謀に対する懸念が非常に強まり、危機感は宗教対立イデオロギーの中で実際以上に増幅されて人々の不安を煽った。特に宣教師の魔術的な説得力は、非常に恐れられ、悪魔視されたが、最大の脅威は、彼らが仄めかす「免罪」であった。唆されて陰謀に走る者は、大義につながる目的達成のためなら手段を選ぶ必要はない。劇の結末でフランス王を殺害するジャック・クレメンと議事堂爆破事件を計ったイエズス会派のガーネット神父は、その典型的な実例である。シェイクスピアは『マクベス』の門番の場面で「二枚舌野郎」(II.iii.8) を諷刺しているが、そこには、審問の際に陰謀を嘘で巧みに隠蔽することを正当化したガーネット神父への諷刺が背後にあるとされている。イエズス会派の陰謀と「二枚舌の原理」への不安は、王殺しへとマクベスを誘導する魔女の強烈なイメージにくっきりと投影されている。マーロウの場合も同様に時代の不安と危機感が劇作家の想像力を触媒としてギーズというマキアヴェリストを舞台に産み出したと言えよう。

首都の反王権クーデター

虐殺事件以降、ギーズを盟主とする旧教同盟が力を増し、シャルル九世の死後、即位したアンリ三世(1574-89)の以下の言葉に見るように、王権との軋轢さえも引き起こす。

ギーズよ、余の王冠を被り、
　おまえがフランス王になるがよい。
そして独裁者として戦争するも、
　和平を結ぶも勝手にせよ。
余は評議員の如く
　「御意」とだけ唱和しよう。
もはやおまえの傲慢さには
　耐えられぬ。
おまえの軍勢を解散せよ、
　さもなければ勅令によって
おまえを謀反人として
　フランス全土に宣言する。
(XIX.55-60)

1588 年にギーズがパリに入るとパリ市民はアンリ三世に反旗を翻し、「バリケードの日」事件が起きる。「今やパリはギーズの側につき、/フランス国王が留まる場所ではない」(XIX.91-92) と王はブロアに逃れる。これによってアンリ三世とナヴァールが再接近し、カトリック王権とプロテスタント勢力が協力して、旧教同盟に対峙するという複雑

な図式が展開する。

王に対する首都のクーデターという前代未聞の事件を、対岸の英国ではどのような思いで見ていたのだろうか。シェイクスピアの『間違いの喜劇』におけるフランス内戦についての言及(III.ii.122-4)は、当時の英国人の関心を示している。アンリ三世暗殺後にアンリ四世(1589-1610)として即位するナヴァールは、後にカトリックに改宗し(1593)、英国を初めとするプロテスタント諸国を失望させるが、元々はユグノー側の貴族であり、王権とカトリック陣営の対立は明確な内乱として先鋭化する。ナヴァール支援のために英国よりフランスに派遣されたエセックス伯は、旧教同盟の指導者ギーズとはちょうど正反対の立場にあり、新教徒の熱烈な支持を集めていたが、英国軍指揮官としてルーアン包囲(1591-92)に参加したものの、成果は上らず、他の失態などもあり、女王の不興を買う。エセックス伯は、後に、『リチャード二世』を決起前夜に上演させて、翌日にロンドンのシティを行進し、女王に対する反乱の決起を計ったが(1601)、その時、彼は、身をもって体験したフランスでの反王権クーデターを意識してはいなかっただろうか。いずれにしても事件後の国事犯裁判で審問官の役割を果たしたフランシス・ベーコンは、ギーズが八人の部下と共に引き起こした「バリケードの日」に巧妙に言及し、エセックスは否応なく自分の行為とパリでのクーデターとの類似性を認めざるを得なくなる。[17] ロンドンの舞台でアンリ三世がギーズに「もはやおまえの傲慢さには耐えられぬ」と申し渡す場面が演じられたとき、同様の思いが女王とエセックスを決定的に対峙させる日も少しずつ近づいていたのである。このルーアン包囲に関連してマーロウが英国大使への使者として派遣されていたことを示す記録が残っている。[18] それが事実であれば、どのような形であれ、エセックス伯とマーロウの足跡はフランス宗教紛争の現場で交差しているということになる。彼らがそれぞれそこから何を学んだかについては推測するしかないが、フランス宗教紛争の中で醸し出された反王権イデオロギーはイギリスにも飛び火し、『パリの大虐殺』はその火種が産み落とした劇作品と言っても良いだろう。

ただし、ギーズという人物には、ある限界が設定されている。彼は、王権に抵抗しながらも、結局は旧秩序を越えられないし、真の王権の奪構築者にも成り切れない。シーザー主義者のギーズは身に迫る暗殺の警告を無視する。

だがシーザーは行く。
卑賤な者は死を恐れるがよい。
そんな輩は百姓だが、俺はギーズ公だ。
王侯は眼差しで畏敬をかき立てるのだ。
(XXI.67-70)

結局、刺客によって致命傷を負ったギーズの「百姓どもの手に掛かり死ぬとはなんたる悲しみ」という台詞は、階層性の転覆を企てた彼が、正にその中で破滅したことを皮肉に示している。ギーズ一門の枢機卿を暗殺する刺客も「お前が法王であっても俺達からは逃れられない」と言う (XXII.2)。野心に盲従して皮相な権力ゲームに走ったマキアヴェリスト達は、真のマキアヴェリ的な政治世界の中で自ら滅びるのである。王・法王を頂点とする階層の奪構築は、最終幕のアンリ三世暗殺によ

ってクライマックスを迎える。免罪を信じた僧クレマンは、正に「二枚舌野郎」の曖昧な言葉で忠誠の程を示し、油断した王を刺殺する。王は、最後の力を振り絞り、「英国からの使者をこちらにすぐ呼べ」(XXIV.49)と言う。この「使者」に誰が投影されているかは、プロスペロの場合と同様に明白である。「使者」が伝えねばならない情報は、あまりにも政治的に微妙である。このような機密を芝居にして世にさらすような「使者」がいるとしたら、マーロウのように居酒屋で怪死を遂げても仕方のないことであろう。オットマンの英訳版の「読者に」にも述べられているように、警告は英国女王に伝えられねばならない。ネーデルランドでのオラニエ公暗殺(1584)の先例もある。しかし国外からの警告を待つまでもなく、同類の陰謀はすでに日常化していた。[19]『アンチマキアヴェリ』の英訳者は、「かくも偉大な女王を頂き、それ故に伝染病のごときマキアヴェリの教説が最上の幸に満ちたイングランドに入り込む余地はなく、なんと幸いなことか」と述べたが、その希望的観測は幻想にすぎなかった。[20] 警鐘としての劇の政治的メッセージは、王権にとって諸刃の剣であり、観客の愛国主義的感情を越えて、17 世紀にイギリスに訪れることになる国王処刑の時代をも予示している。

註)

1. A. L. Rowse, *Christopher Marlowe: A Biography* (Macmillan, 1964), pp. 99-107.
2. Wilbur Sanders, "Dramatist as Jingoist" in *The Dramatist and the Received Idea: Studies in the Plays of Marlowe and Shakespeare* (Cambridge U. P., 1968), pp. 20-37.
3. Margot Heinemann, "Political Drama" in *The Cambridge Companion to English Renaissance Drama* (Cambridge U. P., 1990), pp. 161-205.
4. H. J. Oliver, ed., *Dido Queen of Carthage and The Massacre at Paris* (Methuen, 1968), pp. xlix-l. 疫病は劇場を閉鎖する格好の口実であった。市当局を支配する清教徒達は、疫病は社会の堕落に対する天罰であり、演劇はそのような堕落を一層悪化させる悪弊の最たるものと見なしていた。本論における『パリの大虐殺』からの引用は本書による。尚、引用の訳文は、すべて筆者によるものである。
5. Niccolò Machiavelli, *The Discourses*, trans. Leslie J. Walker (Penguin Books, 1983), I. 11 (pp. 139-42).
6. グラフは以下のサルモンの文献リストをもとに作成した。J. H. M. Salmon, *The French Religious Wars in English Political Thoughts* (Clarendon Press, 1959), pp. 171-80.
7. Carol Z. Wiener, "The Beleaguered Isle. A Study of Elizabethan and Early Jacobean Anti-Catholicism," *Past and Present*, 51 (1970), 27-62.
8. François Hotman, *A true and plaine report of the Furious ourtages of France* (1573; STC 13847). ラテン語版の原題は、*Franco-Gallia* であり、ユグノー政論家の暴君放伐論の原点とされる。マーロウの広範なパンフレットの知識については、Paul H. Kocher, "Contemporary Pamphlet Backgrounds for Marlowe's *The*

Massacre at Paris," *MLQ*, VIII (1947), 151-73, 309-18; Kocher, "François Hotman and Marlowe's *The Massacre at Paris*," *PMLA*, LVI (1941), 349-68; Julia Briggs, "Marlowe's *Massacre at Paris*: A Reconsideration," *RES*, Vol. XXXIV, No.135 (1983), 257-78.

9. Thomas More, *Utopia*, trans. Ralph Robinson (1576; rpt. Everyman's Library, 1992), pp. 106-7.
10. Mario Praz, "Machiavelli and the Elizabethans," *Proceedings of the British Academy*, XIV (1928), 49-97.
11. Thomas Hugh Jameson, "The 'Machiavellianism' of Gabriel Harvey," *PMLA*, LVI (1941), 645-56.
12. Francis Bacon, "On Unity of Religion" in *Essays* (Dent, 1983), pp. 8-12.
13. Philippe Erlanger, *Le Massacre de la Saint-Barthélemy* (Gallimard, 1960), pp. 206-8. 図3、4、5の出典は本書である。本書の他に、聖バルテルミー虐殺事件やフランス宗教戦争の概要について述べた書として、Georges Livet, *Les guerres de religion* (Collecton "Que sais-je?" No. 1016, 1966) がある。詳しい注記は省いたが、フランス宗教紛争に関して本論は両書を参考にした点が多い。いずれも邦訳が出されている。近現代ヨーロッパにおけるホローコーストの事例に関しては、Walter Laqueur, *The Holocaust Encyclopedia* (Yale U.P., 2001) に詳しい記述がある。
14. Salmon, pp. 2-5.
15. 近代政治学の確立にマキアヴェリが果たした役割と、英国におけるマキアヴェリ受容に関しては、Felix Raab, *The English Face of Machiavelli: A Changing Interpretation 1500 – 1700* (Routledge & Kegan Paul, 1965), pp. 8-29.
16. Jameson, p. 647.
17. Giles Lytton Strachey, *Elizabeth and Essex* (1928)によると、審問の際にベーコンはエセックスを以下のように追及した。「あなたが頼りにしていたのは、一緒にいた連れの者達ではなく、シティで獲得しようと思っていた援助でした。バリケードの日にギーズ公爵は、ダブレットとホーズという軽装で、たった8人の貴族を従えて、パリの通りに姿を現し、パリ市民の助力を得ました。幸いなことに、神のご加護があって、当地では、あなたはそれに失敗したのです。そしてフランスではその後どうなったかというと、国王は、巡礼者の姿に身をやつし、変装によってからくもパリ市民達の暴虐から逃れざるを得ませんでした。閣下は正にそのような成り行きになると確信しておられたのです。それらの外面的な口実は同じで、市民達に挨拶し、キスを贈りたいというもの。しかし真の目的は、すでに十分証明されているように、反逆だったのです」(p. 252)。
18. Philip Henderson, "Marlowe as Messenger," *TLS* (12 June 1953).
19. G. B. Harrison, *An Elizabethan Journal 1591-1594* (1928), pp. 68-71, 74-77, *et passim*.
20. 原文は Jameson によって引用されている(p. 653)。